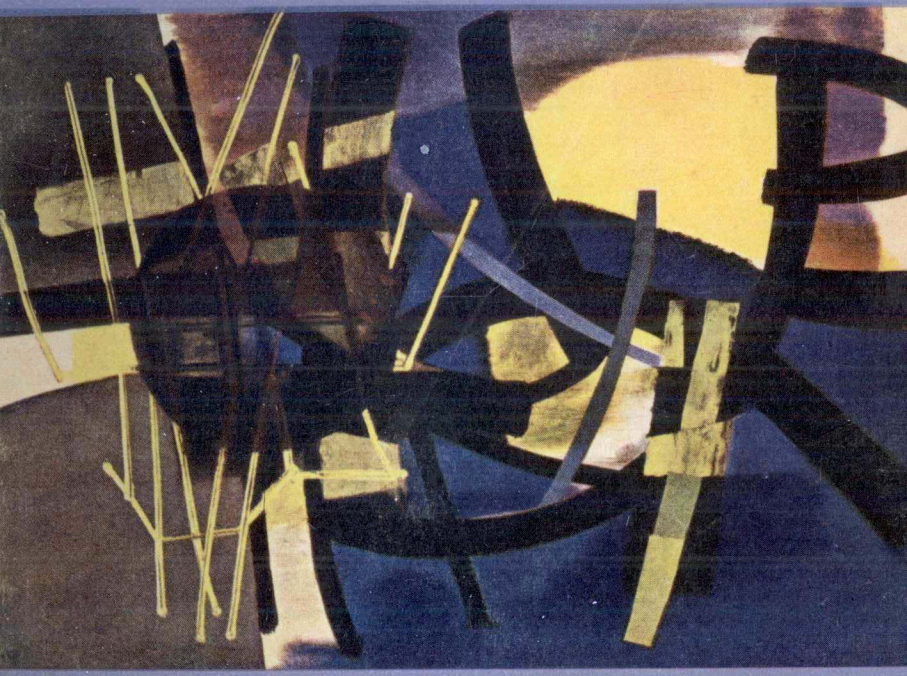
Ф. М. ДОСТОЕВСКИЙ



БРАТЬЯ КАРАМАЗОВЫ I

SHINCHOSHA

カラマゾフの兄弟

I

ドストエフスキー
米川正夫譯

新版世界文學全集
16

新潮社版

新版世界文学全集 16

カラマゾフの兄弟 I

昭和三十二年十二月二十一日 印刷
昭和三十二年十二月二十五日 発行

定価 参百五十円
地方売価 参百六拾円

訳者 米川正夫

発行者 東京都新宿区矢来町七一 佐藤義夫

発行所 東京都新宿区矢来町七一 株式会社 新潮社
電話東京(34)七一一一～九番
振替東京 八〇八番

印刷 扶桑印刷株式会社
製本 共同製本株式会社

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替へいたします。

© Printed in Japan

解説

『カラマーゾフの兄弟』はドストエーフスキイの絶筆として特殊の意義を有しているばかりでなく、この文豪がすでに十数年以前から想を練り、プロットを案じて、畢世の大作たらしめんと意気込んでいた念願を実現したもので、彼の芸術・思想の一大総合であり、総決算である。その意図の雄大、小説的構成の複雑、哲学的達観の深遠なことは『ファウスト』を凌ぎ、その人間愛の熾烈、宗教的信仰の高邁なことは、『神曲』と並んで劣らず、まさに世界文学の古典となるべき偉大な作品の一つである。この意味に於いて、『カラマーゾフの兄弟』は、トルストイの『戦争と平和』とよき対比をなしているが、事実、この長編の出生には、『戦争と平和』が一つの役割を演じているのである。ドストエーフスキイは、常に自分の好敵手と見なされていた天才の大作を読んで、これに劣らぬ広範なロシヤ生活の活画図を示そうという、内部衝動を感じたものらしい。一八六九年、彼がアンナ・グリゴーリエヴナ・スニートキナと再度の結婚をして外遊の途に上り、イタリヤのフローレンスに滞在中、詩人アポロン・マイコフに宛てて、次のように書き送っている。

「ここで目下小生の頭脳に宿っているものは、第一に、膨大な長編小説です。題は『無神論者』（お願いですから内密にして下さい）。しかし、これに着手する以前に、無神論や、カトリック教や、ギリシャ正教の本を、汗牛充棟もただならぬほど、読破しなければなりません。それは、完全に生活を保証されながら仕事をしてさえ、優に二年の歳月を要するでしょう。ここに一人の人物があります。我々の社会に属するロシヤ人で、しかも相当の年輩、あまり深い教養はありませんが、まんざら無教育でもなく、それに、位階官等といったようなものをもっている、――それが突然、もういい年をしながら、神に対する信仰を失うのです。この男は一生、勤務以外には何一つしたことがなく、軌道を行くような生活を一度も抜けたこともなければ、四十五の年までこれといって取立てたことも仕出かさなかった（この謎の解決は、心理的なものです、――深い感情、人間、しかもロシヤ人）。

神に対する信仰を喪失したことは、彼に深甚な影響を与える（概して、小説中の人物の動きと、筋の変化は、頗る大がかりなものです）。彼は、若き世代の人々や、無神論者や、スラヴ人、ヨーロッパ人、ロシヤの異教徒、隠遁者、僧侶などの間を彷徨する。わけても、ポーランド人のゼスィット派の宣教師の鉤にひっかかって、すっかり参ってしまう。やがて、そこを離れて、フルイスト宗派（ロシヤの民間に行われた分裂宗派の一）に深入りするが、最後にキリストとロシヤの大地を、ロシヤのキリストとロシヤの神を獲得するのです（どうか誰にも話さないで下さい。小生にとっては、この最後の長編を書上げたら、死んでも思い残すことはないくらいです、――何もかもすっかり吐露してしまうつもりです）。」

しかし、それからまもなく、ドストエーフスキイは『悪霊』を構想し、やがて執筆に取りかかったので、この大長編のプランも、時とともに、自然変更せざるを得なかった。一八七〇年十二月に、ドレスデンから同じマイコフに宛てた手紙には、次のような報告が読まれる。

「……小生は『ザリャー』誌にいい作品を契約するつもりで、立派にそれを仕上げたいものと思っています。この『ザリャー』に予定している作品は、もはや二三年間も、小生の頭の中で熟しつつあるものです。これは、小生が既に貴兄にお知らせしたのと同じ構想のもので、これこそ小生最後の長編となるだろうと思っています。分量は『戦争と平和』くらいで、作の思想は貴兄もかつて、賞讃して下すったことがあります――少なくとも、貴兄と交した以前の会話を思い合せた限りでは。それは五つの大きな小説から成り（各編それぞれ十五台分くらいの大きさです。このプランは二年間に、すっかり小生の頭の中で成熟しきったわけです）、物語は各編とも相互に独立しているので、おのおの別々に発表しても差支えない程です。小生は、第一編をカシュピリョフに向けるつもりでいます。ここでは、事件はまだ四十年代のことになっています（長編の総称は『偉大なる罪人の生涯』というのですが、各編はそれぞれ別に標題を持つことになります）。全巻を貫いている思想は、小生が一生、意識的に、無意識的に苦しんで来たところのもので、――要するに、神の存在ということです。主人公はその生涯の間に、あるいは無神論者となり、あるいは信仰家となり、あるいは狂信者となり、あるいは分裂宗徒となり、更に再び無神論者となる。第二部の物語は、ぜんぶ僧院内の出来事です。小生の希望は、挙げてことごとく、この第二部にかかっている次第です。今度こそ、おそらく世間の人達も、あの男は万更つまらないものばかり書いているわ

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

けでもないといってくれるでしょう（アポロン・ニコラエヴィッチ、貴兄一人にだけ打ち明けますが、この第二部の重要人物の一人として、チーホン・ザドンスキイが登場します。勿論、名は変えますが、やはり僧正で、僧院の中で行い澄ましているのです）。十三になる、頭の発達した、不良の傾向をもっている一人の少年が（小生はこのタイプを知っています）、ある刑事事件に関係して、両親（われわれと同じサークルに属する教養人）に、修行のためと云って僧院へ入れられる。この仔狼のようなニヒリストの少年が、チーホンと意気投合するのです（何分、貴兄はチーホン僧正の性格も人物も残らず御承知でしょう）。その同じ僧院にチャアダーエフ（有名な『哲学的書翰』の著者、ロシヤの歴史的、政治的、文化的の価値をことごとく否定して、そのために狂人と宣告され、健康診断を口実として当局の監視を受くるに至った）を入れるつもりです（名前を変えることは勿論ですが）。チャアダーエフだって一年くらい僧院に籠っていけないという法はないでしょう？　一つこういうことを想像して下さい。チャアダーエフが最初の論文を書いて、毎週、医師達の診断を受けるようになった後、とうとう外国へ奔って、フランス語のパンフレットを出版したとしましょう、――そのために一年間、僧院へぶち込まれたというのは、大きにありそうな話ではありませんか。そのチャアダーエフのところへほかの連中、例えば、ベリンスキイやグラノーフスキイはいうも更なり、プーシキンでさえ訪ねて来るというのも、あり得ることでしょう（小生の描こうとするのは、チャアダーエフその人ではなく、ただ、このタイプを小説に取り入れるだけなのですからね）。僧院の中には、パーヴェル・プルススキイもいれば、ゴルボフ（スラヴ主義的思想を主張した僧侶）もおり、僧侶パルフェーニイ（『遍歴物語』の著者として知られている）さえいるのです（この世界にかけたら、私は物識りで、ロシヤの僧院を子供の時分から知っています）。しかし、重要なのはチーホンと少年です。お願いですから、この第二部の内容は誰にもしゃべらないで下さい。小生は、自分のテーマを、誰にも先回りして教えないことにしているのですが、貴兄にだけ打ち明けた次第です。他人にとっては、一文の値打ちもないことかもしれませんが、小生にとっては、大切な宝なのですからね。チーホンのことは、くれぐれもしゃべらないで下さい。小生もストラーホフに、僧院のことは書いてやりましたが、チーホンのことは書かなかったようなわけですから、もしかしたら、荘重神聖な肯定的人物を描き出すことが出来るかも知れません。これはもうコスタンジョグロ（ゴーゴリ『死せる霊』第二部の主人公となるべく予定された有徳な善人）でもなければ、『オブローモフ』に出てくるドイツ人（名を忘れました）でもなければ、ロプホフやラフメートフ（両者共チェルヌイシェーフスキイの小説『何をなすべきや』の主人公）でもありません。もっとも、小生は何一つ創造するわけではなく、自分がすでに久しい以前、

歓喜とともにわが心に受け入れた真実のチーホンを表出するに過ぎません。しかし、もしこれが成功したら、小生にとって、正に一つの功業であると心得ています。誰にも漏らさないで下さい。しかし、この第二部のためには、この僧院のためには、小生はロシヤに住んでいなければなりません。ああ、万一これが成功したら！　第一編は主人公の少年時代ですが、もちろん、子供たちばかり登場するわけではありません。なんといっても小説ですからね。そこで、これなら幸い外国にいても書けるので、『ザリャー』に提供する次第です……

（欄外付記）　いずくんぞ知らん、ほかならぬこのチーホンこそ、わが文学の求めているロシヤの肯定的典型であって、ラヴレーツキイ（ツルゲーネフ『貴族の巣』の主人公）でもなければ、チーチコフ（ゴーゴリ『死せる霊』の主人公）でもなく、ラフメートフ輩でもないかもしれません。」

なおそのほか、ドストエーフスキイは一八七七年の日付のある覚書に、『生涯に対するMemento』と題して、ロシヤの『カンディド』（ヴォルテールの哲学的小説）を書くこと、キリストの小説を書くこと、などと書きつけているが、これらの言葉によって見られるごとく、ドストエーフスキイの畢生の大作のプランは、彼の胸中で次第に最後の実現たる『カラマーゾフの兄弟』に近寄って来たことが看取される。チーホン・ザドンスキイは勿論、ゾシマ長老であり、僧院に入れられたニヒリストの少年は、コーリャ・クラソートキンとアリョーシャ・カラマーゾフの二人にわかれ、チャアダーエフはイヴァン・カラマーゾフに変形していったのである。またキリストに関する小説の意図は『大審問官』の一章に於て、ある程度の実現を見たということも出来よう。ただこの作品ぜんたいがいかなる経路をたどり、いかなる変化を重ねながら、現在見るがごとき形に落着いたかは、作者が残した豊富な創作ノートによっても、ついに明瞭にすることの出来ない創造の秘密である。ただ我々に知られているのは、『偉大なる罪人の生涯』という総題は一まず解消せられ、大長編の構成分子たるおのおの独立せる物語も、五編から二編に削減されたことである。その第一部は、この『カラマーゾフの兄弟』であり、第二部は十三年後のアリョーシャ・カラマーゾフが主人公として活躍する、ぜんぜん別個な物語となるはずであった。

ドストエーフスキイは『悪霊』の完結後も、構想の完全に円熟するのを待つかのごとく、更にもう一つの中間的作品『未成年』を書き上げた後、ようやく一八七七年のなかば頃から、全精力をこの大長編に集注しはじめた。それがために、彼が直接読者に話しかける重要な機関として深い愛着をいだいていた個人雑誌『作家の日記』も、

一八七七年の十二月号をもって一応休刊とし、専心『カラマーゾフの兄弟』の創作に没頭した。やがて、一八七九年の一月から、最初の部分が雑誌『ロシヤ報知』に連載されはじめ、一八八〇年十一月をもって完結した。しかし、この完結後わずか三ヵ月で、ドストエーフスキイが長逝したため、第二部のプランが永久に墓のかなたへ持ち去られ、闇から闇へと葬られてしまったのは、返すがえすも遺憾なことと言わなければならない。

とはいえ、この事実も『カラマーゾフの兄弟』の偉大な価値を、寸毫も減じないのは勿論である。それどころか、人間性のあらゆる隅々隈々を見きわめた魂の透視者が、不安な動揺時代に生れ合せたロシヤ人の苦悶を底の底まで探り尽して、人間と神との間に架け渡した貴い橋として、永遠に人類の心の糧となるべき偉大な啓示の書である。ロシヤでもこの小説が発表された時、一般社会の受けた衝動は、並々ならぬものであった。かつてゴンチャロフの傑作『オブローモフ』が、ロシヤ人の国民性を道破したものとして、「オブローモフシチナ」という新語を生んだように、このドストエーフスキイの最大作も、同じロシヤ国民性のまったく正反対な、思いがけない一面を啓示したものとして、新しく「カラマーゾフシチナ」なる言葉が高唱されるようになったのである。従来、単純、緩慢、鈍重、優柔と言ったような気分を象徴する「オブローモフシチナ」(オブローモフ的な人物もしくは精神)がロシヤ国民性の全体を抱擁するものと思われていた時、それとまったく対蹠的な混沌、狂乱、激動、極端から極端へ走るがむしゃらな性質を表示する「カラマーゾフシチナ」も、やはり紛れもないロシヤ国民性の反面であることを示されて、人々は深い驚愕に打たれたほどである。まことにこれは、ロシヤおよびロシヤ人を理解せんとする人にとって、必ず逸することの出来ない貴重な宝典である。

ここに一言して置かなければならぬことがある。ほかでもない、先にもすでに触れた『戦争と平和』との対比であるが、トルストイのこの大叙事詩も、ロシヤ研究者のために無尽蔵の資料を秘めた宝庫とよばれている。けれど、同じくロシヤ研究の宝典と言っても、両者の間には根本的な差異が存する。トルストイは、ロシヤ人の生活をあるがままの姿に於いて立体的に描いて見せたので、その一つ一つの場面や心理解剖は、作品を離れても立派に現実のものとして読者の想像裡に生きて動いている。我々はそれを指さして、これこそ現実のロシヤであるということが出来る。しかるに、『カラマーゾフの兄弟』にあっては、ただにロシヤのみならず、いかなる国であろうとも、普通の日常生活では所詮見ることも、聞くことも、体験することも出来ないような、常軌を逸した感

情や、埒を踏み破った欲望や、この世の限界を越したかと思われるほどの深刻な思想の沈潜や、後から後から畳みかけて重なって来る異常な事件の旋風が、読者を鷲づかみにして目まいを感ぜしめ、なかば夢幻の境へ拉し去るのである。我々は作品の世界に没入している限りにおいては、それらの事件や心理が、否応のない必然性を有し、そこになんらの不合理も超自然性もないという気持をいだきつづけるけれども、一たびその作品の世界から出て振り返ってみると、そこに描かれた個々の場面なり人物なりが、そのままロシヤの現実生活から切り取って来たものであるとは、なんとしても言うことが出来ない。例えば、この膨大な長編のほとんど三分の二に亘る部分が、僅か三日間の出来事であるということだけを取り上げてみても、これは普通の現実生活に於ける時間の算定を無視したものであって、J・マリの言葉を借りるならば、ドストエーフスキイの芸術の本質は「時間なき霊の世界」の啓示である、とも言えなくはないのである。

しかし、これはドストエーフスキイの特異な作家的資質が、たまたま彼の作品にこのような宇宙的な形而上性を与えたまでであって、彼自身の最も大きな関心事は、ロシヤの運命である。ロシヤ人の有するすべての欠点病所を剔抉して、その中から輝かしい真の本質を探り出すということが、彼の創作の根本的意図であった。彼は不断の緊張をもって、祖国ロシヤを動揺さす外的、内的の原因を究め、ロシヤ人の不安な魂のおのきに鋭い凝視をそそいで、その国民性の深い根本をしっかと把握したのである。ただその把握の仕方が、浅い日常生活の表皮を排除して、あまりにも深奥な根本を突いているので、それを表現するには、普通のレアリズムの方法によることが出来なかった。一見して幻想的と観ぜらるる彼の創作形式は、彼があまりに徹底したレアリストであったことから生じた結果にほかならない。『戦争と平和』に示されたロシヤが、可見の世界を代表するものとすれば、『カラマーゾフの兄弟』のロシヤは、その隠された姿を具象化したものである。「カラマーゾフシチナ」は、その怪奇異常な外見にも拘らず、ロシヤ国民性の中に含まれた不可思議な力を説明する唯一の鍵とさえ言えるのである。

『カラマーゾフの兄弟』の舞台は、ロシヤのある田舎町となっているが、どこのいかなる町とも分明しない。ドストエーフスキイは、ようやく第十一編に至って、その名を示したが、それはスコトプリゴーニエフスク（家畜追込町）という荒唐無稽な名称にほかならない。所詮、時処を超越した物語であって、その性格もロシヤ的であ

ると同時に、全人類にまで達した普遍性を有することになるのである。しかも、その町の郊外には僧院、オプチナ・プストゥインという、ドストエーフスキイもしばしば訪れ、トルストイも家出の後、すなわち死の直前に立ち寄った、有名な僧院に似た寺がある。すなわち、現実と空想の結合である。そして、この小説の登場人物は、さまざまな人間的特質や性癖を人格化したものに過ぎない。肉体的な因子は、主として父フョードル・カラマーゾフに現われ、その子供らにおいては、知・誇・貪婪な生活欲はイヴァンに、無意志・欲望の放縦・情的資質はドミートリイに、精神的・宗教的傾向はアリョーシャに、奴隷的卑屈と毒念は私生児スメルジャコフに伝えられた。そして、主人公、第二義的人物、婦人、子供などまでをつかむ情欲と、生の闘争の渦巻く中に展開される、息づまるごとき悪夢に対照して、荘重なるゾシマ長老（チーホン・ザドンスキイ）の姿が立ちあがる。このゾシマは、かつて反抗的精神の持主であり、生活の紛糾の中で人を辱しめ、かつ人からも辱しめられて、最後に僧院を安住の地とし、最高の真理に到達しながら、なお浮世のことに無関心ではいられない特異な存在なのである。

まず順序として、家長である父フョードルを検討しよう。彼はかなり独創的な人物で、人生を見る目にも、独特の鋭さを持っている。しかし、十八世紀の終りから十九世紀の初頭に亘るロシヤのインテリの一人として、ヴォルテール一派の啓蒙哲学と無神論の影響を受け、しかもその皮相のみを吸収したために、彼の人生観はきわめて否定的なシニックなものとなり、その生活態度は、無恥厚顔な道化者流なものとなった。人生を無意義な空虚なものと見切ってしまった彼が、この空虚をみたすために、肉的快楽を唯一の目的とし、それを得る方便として金銭を追及し、それを妨げる一切の義務を弊履のごとく棄ててかえりみなかったのは、怪しむに足らぬ。彼は五十を越えて、人生の下り坂に向いながら、いつまでも、生のつづく限り、この卑しい快楽の杯を口から放すまいと考えた。しかし、彼の肉体は貪婪な情欲を裏切った。過去の生涯に於ける無節制の精力の乱費は、ヴォルインスキイの解釈によれば、時ならぬ生理的老衰を結果したのである。カラマーゾフ的な、本能はますます病的な緊張を加えてゆくにもかかわらず、その肉体は、端の方からだんだん腐蝕していった。かつて彼のために生の空虚を忘れさせた情欲も、今はただいたずらに、彼をいらだたせ、疲弊させる、残酷な責め道具にすぎなくなった。フョードルは、今まで自分の全存在を形づくっていた肉的快楽にたいする無力を意識するようになってから、いっそうはかない幻想的な情欲を燃え立たせずにはいられなかった。そこに、この無恥な道化の悲劇が存するのであ

る。

元来、彼は人生の目的・神・来世などという第一義の問題に、いい加減のところで見切りをつけ、すべての神聖なるものに、辛辣な嘲罵を向けながら、浮世を二束三文に茶化しきった道化の役回りを選んだが、深い思索によって到達した徹底せる無神論者ではなかった。そのために、いま彼の肉体が凋落して、内部の意志と外的な条件の間に空虚な罅隙が生じはじめた時、神と未来にたいする疑問が、退廃したあくどい歓楽のあいだから、時時そっと顔をのぞけるのであった。こういうとき、彼はしばしば、「何かしら未知の恐ろしい危険なもの」にたいする恐怖を感じた。というのは、彼の内部に隠れていた別種の潜在意識が、肉体の凋落につれて、知らずしらずの中に生を離れ、これまで冒瀆に冒瀆を重ねていた神の方へむかいはじめたのである。彼の恐怖も、要するに、この冒瀆を加えた神に対するものにほかならぬ。この不安と寂寞の感じは、彼の心に、己れの無意義な醜い過去を懺悔し、未来の救いを祈りたいような要求を呼びさましたが、彼の魂はあまりに茶毒され、不具にされていた。こうして、彼の内部衝動は、常に酔い痴れた道化の気まぐれで終らねばならなかった。

要するに、彼は自分でもいっている通り、一つの「小型な悪魔」であった。情欲の方面から見ても、触れるものをことごとく燎きつくす烈しい力を示すことが出来ないで、単にいまわしく醜い残骸をさらした彼は、思想の方面においても、否定と信仰のいずれにも徹し得ず、作者の定義している通り、「意地わるでセンチメンタル」な人間として終った。彼は結局、西欧文明の種子が十八世紀末の耕されざるロシヤの荒地に落ちて、あわれむべき不具な成長をなしたものにすぎないけれども、その退廃した血の中には、驚くばかり力強い酵母が含まれていて、それが三人の子の中に、巨人的な発育を遂げたのである。即ち、彼の無気力なデカダン的情欲からは、男性的に力強くかつ真摯なドミートリイが生れ、彼の浅薄で狡獪なシニズムからは、イヴァンの悪魔的な大否定が生じ、彼のいびつなセンチメンタリズムは、アリョーシャの輝かしい人類愛となって成長したのである。

フョードルの長子ドミートリイは、物語の中でもっとも主要な人物で、一切の事件は彼の周囲に集注し、渦巻いている。粗暴なくらい旺盛な生活力と、強烈な情熱、詩的で敏感な、しかも正直な心、永遠なものに対する純真な憧憬、これらの相反せる諸分子が混沌として入り乱れ、しばらくも安静ということを知らずに動揺している彼の性格は、徹頭徹尾ロシヤ的といわなければならぬ。彼は旺盛な生活力の衝動に任せて、なんの反省もなく、

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.

放縦無慙な生活を送ったが、彼の魂の中には、こうした刹那の衝動に生きる横暴な悪魔的要素のほかに、いま一つ漠然として捕捉し難いものであるけれど、深い根ざしを持った神性の胚子が宿っていた。かつて傲岸なカチェリーナが父を救うために、彼の無恥な提言に応じて、処女の誇りを金に換えようとした時も、ドミートリイは自分の極悪非道な気分や計画を、最後まで押し通すだけの図太さに欠けていた。彼の心内の地獄の火は、どこか魂の一隅に閉されている涙に湿されて、完全に燃えつくすことが出来なかったのである。彼は、最後の瞬間に、無言のまま女に金を与えて、一指をも触れずして帰してしまった。

その後、グルーシェンカに会って、さながら雷に打たれたようなショックを感じると、身分ある令嬢との婚約も肉親の父との競争的位置をも無視して、まっさかさまに奈落へ堕ちて行くような気持で、この淪落の女の愛を求めはじめたが、こうした堕落の目くるめくような感覚に酔いながらも、魂のより深い奥底に秘められている「マドンナの理想」に制せられて、嵐のような情欲の奔騰を妨げられがちであった。また、彼が恋人を奪われたものと思い込んで、狂憤のあまり既に危く父を殺そうとした時も、彼のうちに宿っている光明の精霊が、野獣的衝動を制御して、柔い疑惑と躊躇の雲に包んでしまった。こういう風に、すべての彼の感情行為は、いつも突発的に、否応ない狂暴な力をもって襲来するかと思うと、また忽ち電光のごとく消え去って、再び同じような力をもった新しい衝動に代えられる。それは、つまり彼の純朴で正直な、美しい、とは言え十分に訓練されていない直線的な性情に起因するものである。それゆえ、彼は「神と悪魔の戦場」とも言うべき分裂した魂をいだきながら、常に充実した、鮮明な、力づよい生活感を経験することが出来た。

いなみ難いさまざまな事情の結合のために、恐ろしい親殺しの罪を擬せられた時、彼はたまたま、うたたねの中に見た「餓鬼」の夢の啓示から、一つの精神的転機に逢着した。黒くしなびた泣き叫ぶ餓鬼の中に、地上を充している人間苦の姿をまざまざと見た彼は、今すぐにも不幸な人類の涙を止めてしまわねばいられないような、カラマーゾフ的のがむしゃらな欲望を感じた。こういう風に、いったん人間生活の悲惨を痛感して、その救済の使命を自己の内部に直覚するやいなや、周囲の状況も可能性も計量する遑なしに、自分の宗教的内観に啓示された真理を目ざして、遮二無二突進して行くところが、理知的に訓練された西欧と、ロシヤとの相違点である。文明国民は、あまり歴史的進化の法則に執し過ぎるため、行動の自由奔放を欠く傾きがあるが、まだ原始的な単純

と新鮮とを失わないロシヤは、気ちがいじみた感激と若々しい直覚を通じて、より多く神の真理へ跳躍することが出来る。この跳躍はドミートリイの心内に新しい人間を生み出した。彼は大なる人類の悲しみに対して一種の神秘的責任を感じ、苦痛によって自己をきよめるために、敢然として恐ろしい十字架、親殺しの冤罪を身に引き受けた。彼が自ら「地下の頌歌」と呼んだ獄中の告白は、実にロシヤ的人生観の精髄であるとともに、生ける霊からほとばしり出た宗教的ペーソスの頂点である。

このドミートリイについて、批評家ローザノフは興味のある観察を述べている。ドストエーフスキイの描く人物はほとんどすべて例外なく、多くの作品に繰り返されて、同じ性格の異った特徴なり、類似の思想的傾向の更に深化した形なりが提示されるを常とする。例えば、フョードル・カラマーゾフは、『スチェパンチコヴォ村』のフォマー・オピースキン、『罪と罰』のスヴィドリガイロフなどを、ほぼ同一系列に属する典型として指摘することが出来、イヴァンがラスコーリニコフ、スタヴローギンの延長であることは言を俟たず、アリョーシャは『白痴』のムイシキン公爵の双生児である。ただドミートリイだけは、ドストエーフスキイの過去のいかなる作品にも類似の人物を捜し出すことが出来ない。これこそこの文豪が死の前に創造した最初の新鮮潑剌とした独自な典型である。ローザノフのこの説に対して、『虐げられし人々』のアリョーシャ、『悪霊』のレピャードキン大尉を挙げるものもあるが、その類似点はあまりにも薄弱すぎるのである。

第二子イヴァンは、思想的カラマーゾフシチナの代表者である。彼のカラマーゾフ的貪婪性は、理知の方面に伸張して行って、抽象的思索に無限の深みを求めてやまなかった。最高の学府に近代的教育を受けた彼は、自然科学者の立場から、神とか、不死とか、良心とか、そういう神秘的分子の存在を許容しなかった。いったんこういう方向を取った彼の思想の流れは、一切の妥協を排しつつ、恐れげなしに超人的な驀進を続けて、ほとんど人間性の達し得る限りの荒涼凄愴たる極北にまで辿りついたのである。この逞しい探究から抽出した彼の結論は、不死もなければ善行もない、従って他人を愛さねばならぬという自然律はこの世に存在しない、故に一切の行為は許されている、というのである。イヴァン・カラマーゾフは、ラスコーリニコフやスタヴローギンと同一の系列に立つ人物であるが、しかし彼の否定はラスコーリニコフのそれよりもはるかに大胆である。ラスコーリニコ

フは一方から見れば、彼の親友ラズーミヒンの指摘した通り、「犯罪は社会組織の不合理に対する抗議である」という、社会主義者流の見解から出発したもので、一般の福祉という観念に導かれているし、また他方からすれば少数の選まれた人間、――英雄の特権としての犯罪を肯定しているのである。ところが、イヴァン・カラマーゾフはそうした人本主義的な考量や条件など一切なしに、ただ純粋な論理的帰結として、「すべては許されている」の命題を樹立したので、これをくつがえすいかなる根拠もあり得ないと考えている。その意味で、彼は真に悪魔的な存在と言うべきである。しかし、悪魔的といっても、古いロマンチックな観念を含んだものと違って、現代的合理主義と自由思想に依拠する個人主義によって武装しているのである。

とはいえ、イヴァンはドストエーフスキイの創造した主要なる主人公たちと同じく、複雑に分裂した二重人格者であるが故に、死物狂いで到達した結論に安住しきれない人間的なあるものを持っていた。作者も自分の覚書の中で、「イヴァン・フョードロヴィッチは深刻である。これは神を否定することによって自己の世界観の狭隘さと、己れの資質の魯鈍さを証明しているような現代の無神論者とは、類を異にしているのだ。」と書いている通り、彼は単に冷酷な個人主義者でもなければ、「宗教は阿片なり」と言ったような出来合いの定義を鵜呑みにした無神論者でもないのである。人類の不幸な運命、この地上を充している血と涙は、彼をして一刻の間も晏如としていられないほど苦しめ悩ました。そしてついに、自分はあえて神を信じないわけでもなければ、いつかしら遠い未来に実現されるかもしれぬ大調和を否定するものではないが、贖われざる人間の苦痛の上に建てられた調和を認めることを肯んじない。そんな調和の世界への「入場券を返上する」、自分は神を否定しないが、神の創った世界を受入れるわけにはゆかない、――という驚嘆すべき言葉を吐いているのである。彼がアリョーシャに語って聞かせた自作の書かれざる劇詩『大審問官』の一章などは、彼独特の無神論的思想を芸術の形に盛ったものであるが、その弁証法の鋭利さ、その反抗精神の真剣さ、真にこの種の文学中およそ較べるものもない天才的創造である。前掲の覚書と同時に書かれた作者の言葉は、既にしばしば紹介されて人口に膾炙しているが、もう一度ここに引用しよう。「卑劣漢どもは、無教育な退嬰的な信心家と言って余を嘲笑している。ああした薄野呂どもは、『大審問官』及びそれに先行する一章の中に盛られたような力強い神の否定を、夢にさえ見たことがないのだ。あの小説全体は、要するにこの否定に対する答弁なのである。余はただの愚物としてでなく（狂信者として

でなく）、神を信じているのだ。ところが、彼らは余を教えようとしている。余の発達程度が低いのを冷笑している！　いやはや、彼らの愚かな頭には、イヴァンの体験して来たような否定の力など夢にも見られはしない。彼らが余を教えるとは片腹痛い！」

しかしイヴァンは、その冷徹無比な頭脳によって到達した悪魔的な高みに、しっかと足を踏みしめて立っていられない悲劇的な運命を背負っていた。と言うのは、彼にはスメルヂャコフというメフィストがついていたのである。イヴァンに於けるスメルヂャコフは、ラスコーリニコフにおけるスヴィドリガイロフ、スタヴローギンにおけるピョートル・ヴェルホーヴェンスキイとは大なる径庭を有している。後の二者にあっては、それぞれの分身が一種のアルテル・エゴをなしているとはいえ、なんといっても別個の存在であるけれども、スメルヂャコフはイヴァンにとってほとんど自我そのものであって、引離すことの出来ない一身同体をなしているのである。なぜならば、イヴァンもスメルヂャコフも同じくフョードル・カラマーゾフの子であって、同じように父親のシニズムと貪婪性を多分に受継いでいるために、イヴァンの無神論と超人哲学は、完全な同感をもってスメルヂャコフに受入れられたのである。ただ、イヴァンが高邁な哲学的な純理から苦悩とともに生み出した「すべては許されている」という結論に、スメルヂャコフは自己一流の安価な下司的解釈を下して、自分の呪われたる誕生への復讐と小さな利己心の満足のために、事実上の父である主人フョードルの殺害を決心したのである。蛇のような狡知に長けた彼は、深い心理洞察と巧妙な話術とをもって、暗黙の間にイヴァンから父殺しの裁可を得た。とはいえ、イヴァンが心から父親の死を希ったと断言するのは軽率なわざである。勿論、彼の敏感な心はこの恐ろしい事件を予感してはいたものの、それは単に「すべては許されている」という自分の理論の具象化として、緊張した知的興味をもって、そうした事件の可能を空想したに過ぎない。それどころか、常に冷酷な論理に虐げられながら何ものの力をもってしても滅ぼすことの出来ない人間性は、彼の悪逆な想念に死物狂いの抵抗をつづけた、とさえいうことが出来るのである。

不幸な外部的事実の累積のために、ドミートリイの父親殺しの疑いが濃厚となり、司直の眼からも、世間の眼からも、それが動かすべからざる事実のように思われた時、イヴァンも同様にこの想定を信じ切っていた。しかし、たまたまスメルヂャコフの口から、犯人がほかならぬこの異母弟であり、彼イヴァンもその共犯者であると聞か

された時、彼の全存在はがらがらに崩壊してしまったのである。父親の遺産に対する打算が、イヴァンをして父の死を希望さしたのだというスメルヂャコフの残酷な言葉を、彼はこの下男の面前では断固として否定したけれども、自分自身の良心に向って否定しきれないことが感じられた。意識の世界と意識下の世界が混沌として入乱れて、彼を譫妄と幻想の中に投げ込んだ。イヴァンの悪夢に現われる悪魔は、メレジコーフスキイの言葉を俟つまでもなく、ドストエーフスキイの最も偉大な創造の一つであり、世界の文学中他に匹儔のない独自な現象である。それはイヴァンの卑賤低劣な半面の具象化であると同時に、彼の自己批判の鞭でもあり、彼の自ら口にし得ぬ苦悩の代弁者でもある。かくしてイヴァンは、覚めては自分のメフィストであるスメルヂャコフに苦しめられ、寝ては悪魔に嘲笑せられて、ついには自己とスメルヂャコフと悪魔との間の境界を見失い、完全に自己を見失ってしまうのである。

要するに、イヴァンの否定の論理も超人の哲学も、カラマーゾフ的に巨大な力強いものであるが、結局単なる論理の上に築かれたバベルの塔であって、生命そのものではない。しかるに、彼はこの論理のみをもって、現実のあらゆる紛糾錯綜を解決しようとあせった。この点、彼は立派に西欧の代表者と言わねばならぬ。ロシヤ人は矛盾にみちた現実にぶつかって、論理の剣が力なく手中からすべり落ちてしまった場合にも、意識を超越した直覚の力によって、苦痛と汚辱のなかにもなんらかの歓びを捉えるが、西欧人はひとえに己れの理知を恃み過ぎて、しばしば自縄自縛に陥っている。同じ人間苦に対する真剣な憐憫が、ドミートリイにあっては輝かしく勇ましい地下の頌歌となり、イヴァンにおいては悪魔的な神の世界の拒否となった事実は、この間の消息を雄弁に証明しているではないか。しかし、ここに皮肉な事実がある。ちょうど傲岸な西欧が純朴なロシヤを侮蔑するのと同様に、イヴァンは兄ドミートリイを憎みかつ侮蔑している。ところが、ドミートリイはイヴァンの頭脳と教養に対して、敬虔な崇拝の念を抱いている。ちょうどロシヤが西欧の前に跪拝していたのと同じように。

長子ドミートリイが同時代のロシヤを、次子イヴァンが西欧を象徴しているのに対して、第三子アリョーシャは国民的要素を保持しながら、そのために他国民を排除することなく、かえってこの国民的要素をもって全人類を抱擁すべき、未来のロシヤを象徴している。周囲の人々から天使と呼ばれている彼は、静かな僧院を棲家としな

がら、浅ましい煩悩に狂って相反噬している親兄弟の間を、倦むことのない熱心をもって巡り歩きながら、赤く爛れた人々の心にその純な霊性と、若々しい温い真理の霑いをそそいで行く。まことに彼はこの混沌とした、息づまるようなカラマーゾフの王国にさし昇って、柔く懐しい光を放つ匂やかな新月のごとき観がある。正直で、真摯で、露ばかりの毒念もなく、他人に対する限りない同情心に充ち溢れたアリョーシャは、二人の兄のように強烈な、鋭い、個性的なものを持っていない。彼は現実から取って来て芸術的に仕上げられた性格と言おうより、作者の深い憧憬の具体化した理想的典型に近いが、ドストエーフスキイの巨腕はよくこの抽象的性格に、生きた人間としての現実性を賦与することに成功している。例えば『ガリラヤのカナ』の一章において、アリョーシャが恩師ゾシマ長老の死後、星夜僧院の庭へ出て他界との接触を感じ、大地に倒れて土に接吻する場面のごとき、荘重とか崇高とかという言葉で蔽うことの出来ない大きなものを蔵している。これこそ地上において感じ得る最も悠久永遠なるものの直覚を、文字に現わして成功した希有の場合である。

アリョーシャはすべての人から愛されてはいるけれども、彼に対する人々の愛は、カラマーゾフの世界を充している物狂おしい情欲的なものでなく、静かな落着いた精神的な愛であった。彼と生涯をともにしようと約束した少女リーザの愛にさえ、こうした特質が印せられている。彼女は初め懐しい幼馴染としてアリョーシャに純な青春の思慕を寄せていたが、人間に対する彼の深い直観力を知るに及んで、いよいよ強く尊敬の念を覚え、彼とともに苦しめる不幸な人々の看護に従事することを誓った。しかし作者に「悪魔の子」と呼ばれているこの少女の体の中には、アリョーシャの清浄な愛のみでは充されないような、烈しい、気違いじみた血が流れていた。事実、霊的なアリョーシャは憧憬としてこそ美しいけれど、盲目的な青春の情熱の対象たるべく、余りに抽象的に感じられたのである。彼女はイヴァンの悪魔的な高翔とその深刻な内部の苦悶に接して、並々ならぬ痛烈な印象を与えられた。悪魔の子は無意識に悪魔の方へ牽引を感じはじめたのである。かくしてこの可憐な少女の胸にも、神と悪魔の相剋する悲劇がはじまった。リーザはわが身の罪深さを空恐ろしく思いながらも、悪魔の誘惑を斥ける術を知らなかった。で、苦痛によってその罪を贖おうと決心し、我とわが指を扉の間に挟んで爪先に血を滲ませ、それによって己れ自らを罰するのであった。ドストエーフスキイの苦痛哲学に対する最も感覚的な一つの挿絵である。

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.